

Title	Homoerotic fiction created by women and its social function as private cultural resistance
Author(s)	Jessica, Bauwens
Citation	大阪大学, 2007, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/47192
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について <a>〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	ジェシカ バウエンス Jessica Bauwens
博士の専攻分野の名称	博士（人間科学）
学位記番号	第 20812 号
学位授与年月日	平成 19 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 人間科学研究科人間科学専攻
学位論文名	Homoerotic fiction created by women and its social function as private cultural resistance (女性が作成する同性愛フィクションとその私的文化的抵抗としての社会機能)
論文審査委員	(主査) 教授 牟田 和恵 (副査) 教授 木前 利秋 助教授 スコット・ノース

論文内容の要旨

序

本論文の目的は、女性によって描かれるホモエロティックフィクション（「やおい」と「スラッシュ」と呼ばれるジャンル）の生産と消費を通じた、私的文化的抵抗としての社会機能を明らかにすることにある。とくに近年、欧米、旧ソ連、南米、東南アジアなどポストモダンな状況にある国や地域において、日本のやおいが急速にブームとして浸透しつつある。女性のホモエロティック・フィクションへの嗜好が普遍的な現象であるとすれば、それを研究することは、ジェンダー研究において重要な意義をもつと考えられる。

第一章：研究対象の概容と先行研究の検討、および研究の方法論

第一章では、本論文における研究対象の概容を明らかにしたのち、先行研究を検討し、本研究の課題と方法について述べる。

やおいとスラッシュは、ゲイではない男性キャラクターについてのホモエロティック・フィクションである。その作者も読者オーディエンスも、ゲイ男性ではなく、（主に）異性愛女性である。スラッシュの発祥は米国で、女性ファンが SF シリーズの登場人物をロマンチック・エロチックの関係に書き換えたものであり、他方やおいは日本で生まれたが、どちらも 1970 代に起源をもつ。海外においては、フェミニストによるいわゆる Sex Wars、そして反ポルノ運動の時代を背景とするが、やおいの先行者は、70 年代の少女マンガにおける少年愛の物語であったが、その後むしろ少年マンガと共通点をもつジャンルへと変化していった。やおいは現在では、マンガ、小説、最近ではゲームやアニメとして流通し、人気を増している。それに対してスラッシュは、商業用ではない、純粋なファンの手による作品であり、同人誌によるやおいと同様のサブカルチャーである。テーマとしては、スラッシュにおいては SF やファンタジーが、やおいにはスポーツが多かったが、最近ではその差が埋められている。

スラッシュについて、これまで研究の中心的役割を果たしてきたのは、ラッス (Russ, *Magic Mammals, Trembling Sisters, Puritans and Perverts: Feminist Essays*, 1985)、バコン・スミス (Bacon-Smith, *Enterprising Women: Television Fandom and the Creation of Popular Myth*, 1991) とペンレイ (Penley, *Close Encounters: Film,*

Feminism, and Science Fiction, 1991) である。ラッスとペンレイは、みずからスラッシュの作者とファンであり、「スラッシュは女性用のポルノグラフィである」と主張している。一方、日本において、やおいが頻繁に理論的検討の対象にされるようになったのは最近のことである。中島梓は、やおいを心理学的に分析し（『タナトスの子供たち—過剰適応の生態学』、1998）、水間碧は精神分析の視点を用いて分析をおこなっており（『隠喩としての少年愛』、2005）、そして永久保陽子は、やおい小説の分析を行っている（『やおい小説論—女性のためのエロス表現』、2005）。海外においておこなわれた、若手研究者の視点や方法も重要である（McLelland, Hodkinson 等）。これらの研究の中で両ジャンルは、否定的に病理として扱われる場合もあるが、肯定的に、女性文学に伝統に根付いたジャンルとして扱われることもある。

これらの先行研究において大きな問題点の一つは、ファンとアカデミックな研究の違いが明らかではない場合が多いということであろう。「アカファン」（アカデミックな立場にあるファン）は、研究者になる前から、ファンの世界の一員、つまりファンであった人のことである。これによって、さまざまな困難やきしみが生じるが、とくに問題となるのは、アカファンの視野は非常に狭く、包括的な視点にかけるということである。二つ目の問題は、スラッシュもやおいも、ローカルな現象として、別々に研究され、理論付けられてきたため、総合的な視点が欠けているということであろう。やおいとスラッシュがグローバルなステージにおいて、お互いにどんな影響を及ぼすのかを研究する必要がある。そこでまず第一に本論の課題は、両ジャンルを包括的に比較研究することによって、これまで十分に研究・理論化されなかった洞察を得ることである。具体的にはとくに、海外においてのやおいブームが、どのようにローカルなスラッシュ・サブカルチャーに影響するのか。第二は、このジャンルの作品を女性が創作する動機について解明することである。これまでこの点についての理論化は、バトラーのジェンダーパフォーマンス論（Butler, *Undoing Gender*, 2004）を応用するに留まっている（バウエンス、2005、ワード、2006）が、本論ではこのジャンルで構築される「他者」について考えることでこれを発展させる。第三は、海外においてやおいという女性用のホモエロティック・フィクションがはじめて大量に商業的に出版されるという事態が、どのように受容されるのかという問題について考察していく。本研究は方法論として、参与観察法を用いた。フィールドワークは5年間に及び、日本の同人やおい同人誌即売会、海外（独、豪）現地においてやおい愛好家とのインタビューを行うほか、オンラインによって海外と日本のファン・同人コミュニティの調査を行った。本論文の構成は以下、次のとおりである。第2章においては、両ジャンルが現在どのように融合・浸透しあっているかを確認しつつ、そこで浮かび上がってきたこととして、海外においてやおいをグローカライズしようとする場合に文化的ギャップにまつわる問題が生ずることを指摘する。第3章では、ジャンルの性表現としての機能を考察し、それを踏まえて第4章において、ジェンダー研究の視点から、やおいとスラッシュの意味と意義をより深く分析と考察をしていくこととする。

第二章：やおい・スラッシュのハイブリッド化とそこから浮かび上がるもの

第一章において、スラッシュとやおいはさまざまな視点から論じられて来たこと示した。本章において、研究対象の歴史をたどりながら、ジェンダー研究における位置づけと、ジェンダー研究の視点からの重要性を示す。

現在、やおいとスラッシュのハイブリッド化が進行し、海外や、インターネット上で、両者を区別するのはもはや困難である。さらに、これらのサブジャンルである、「ゆり」とフェム・スラッシュ（どちらも、女性同士の恋愛を描くジャンル）もまた、女性によって、女性のために創作されるホモエロティック・フィクションであり、やおいやスラッシュとの共通性を持っている。このように、女性（少女もふくめて）による、女性のためのホモエロティック・フィクションの魅力は普遍的であり、研究対象としての重要性をしめしているのである。このジャンルが、ジェンダー研究において重要なのは、主流のロマンスにおける一般的なテーマや異性愛的な関係性が、ストーリーの中でパロディ化されるという点であろう。ここで浮かび上がるのは、そこには性差を通じて構成される「他者」が欠けており、そこが女性たちをひきつけているということである。

第三章：性表現としての意義

本章では、ファンがどのように両ジャンルをジェンダーを考える装置として使用しているのか、ストーリーの中でどのようにジェンダーの問題が表現され、とくにどのようにして性差を通じた「他者」の構築が回避されているのか

を分析していく。両ジャンルは、文学として、決してレベルが高いとは言えない。しかし、「文学」としてではなく、性的表現の手段として読むと、「性暴力」やその暴力による妊娠というモチーフが、特に同人作品において目立つことがわかる。性差により構築された「他者」がないはずのこのサブジャンルは、mpreg (male pregnancy) とよばれる。これらの物語は、読まれる以上に書かれており、性や生殖に関する女性の不安や恐怖を反映していると考えられる。妊娠する人体は危機の「場」 (a site of crisis) として描かれ、その人体を男性に付与することによって、「性暴力」や「妊娠・出産」等、ジェンダー研究において重大な問題であるような、女性が女性であるという理由だけで経験する事態の不条理が強調される。この指摘はこれまでフェミニズムで議論されてきたことと関係が深い。しかし、フェミニスト理論においては、あまりに難解で、現実の問題と直面する一般の女性には手の届きにくいものと感じられてきた。例えば、これを揶揄して、フェミニスト哲学者ヌスbaumは、バトラーを「パロディー教授」呼ばわりしている (Nussbaum, “The Professor of Parody”, in *The New Republic Online*, 02.22.1999)。だがスラッシュとやおいもパロディーである。であるならば、このジャンルをフェミニストの立場から理論化する時、それはバトラーのパフォーマンス理論に基づいてそれを行なうことにも妥当性があるのではないか？この点については、第4章においてさらに検討していく。

第四章 私的な文化的抵抗とその意味

この章においてはまず、両ジャンルが私的な文化的抵抗と政治的攪乱をもたらすという機能について述べる。海外においてやおいが、フェミニストの行為の象徴と形容され文化的な抵抗として支持されることがある (Strickland, “Why the surging popularity of yaoi — graphic boy-on-boy comics — might be the source of the genre’s downfall”, in *SF Weekly*, 11.01.2006)。つまり、やおいを嗜好し創造すること自体が、家父長制ヘゲモニーへの抵抗なのである。しかし、実際のところほとんどの同人誌のやおいとスラッシュの活動は、プライベート、もしくは「内輪」で行われる。すなわち、対立のない抵抗である。フェミニストの視点からみると、プライベートな場をふくめ、全てが政治的であり、故に、両ジャンルは抵抗として意味があると見ることはできるだろう。しかし、そこに効果はあるのだろうか？この疑問に対しては、次のように答えることができる。第一に、このジャンルを読み物として選ぶことによって、読者は自らを「クイア」として位置づける。クイアになることは、彼らのジェンダーについての考え方に影響を及ぼす。さらに、その考え方は自らのジェンダー役割という行動に影響する、そしてその行動は周囲に影響を与えるだろう。第二に、ポストモダン状況にある社会においては、やおいは近年公の場でも売られるようになった。それに対して、スラッシュはローカルで私的なものであったが、新しく入って来た商業的なやおいが女性のホモエロティック・フィクションへの関心を海外において可視化した。このことは、やおいを文化衝突へ向かわせる可能性もある。マンガやアニメは、全て性的で暴力的なものであるわけではないが、海外においては、そのように批判されることが多い。「西洋文明への脅迫」ととられることもしばしばである。これと同じく「女性用のポルノグラフィ」と呼ばれるやおいは、日本と同様海外において十代の女子に売られる場合、害のある、不適切なジャンルとして解釈される。その結果、女性がアクセスしやすく、創造/想像できるフィクションであるやおい・スラッシュが、検閲や規制をうける可能性も充分考えられるし、すでに小規模なレベルではそれが起きている。そういった規制が頻繁に行われるようになれば、ファンの抵抗も一層公となると考えられる。

結論

本論において明らかになったことは、以下の三つである。第一に、やおいとスラッシュという、女性の手による両ジャンルは、ジェンダーとしてのパフォーマンスの範囲を超えている。やおいとスラッシュにおいては、読者及び作者がジェンダー役割と遊んだり、一時的「クイア」になり、「男装」するだけでない。通常の世界においては性差によって構築される他者である女性自身を排除することによって、ファンが作品の登場人物に感情移入ができ、性差を再生産しないジャンルとして楽しむことが可能となる。第二に、やおいブームはローカルな、スラッシュ・サブカルチャーを変容させ、そして女性のホモエロティック・フィクションへの関心を可視化しつつある。この可視化によって、当初の機能であった、プライベートの場における抵抗も可視化され、ある意味で「公の」ものとなる。最後に、海外に波及したやおいは、「異国の攪乱のエージェント」として、マンガと同様バックラッシュをおこす。そしてそ

のバックラッシュにおいては、現地文化への脅迫として表現されつつある。

以上のように、やおい・スラッシュという、すでにハイブリッド化したジャンルは、単にサブカルチャー、水面下に隠れた一部の女性たちの私的な嗜好という以上に、グローバル化された世界におけるジェンダーのポリティクスの新たな側面を浮かび上がらせるものとして注目に値するのである。

Introduction

The aim of this dissertation is to clarify how women use the homoerotic fiction they create and consume (the genres called slash and yaoi) as private cultural resistance. It is timely to study this phenomenon since yaoi is booming overseas in recent years, and especially in post-modern countries and regions, like the US, the former Soviet Union, South-East Asia, the South-Americas and so on, if women's liking homoerotic fiction is a universal phenomenon, is of great significance in the field of gender studies.

1. Part one : A short introduction to the object of study, a look at earlier research, and at this volume's methodology

In this part I would first like to take a look at earlier research, and select some issues that have been under-researched, or ignored, and that are important from a gender studies perspective. However, before that, it is necessary to clarify the object of study.

Yaoi and slash are both homoerotic fiction about male characters, not by or for gay men, and not about gay men, but by (mostly hetero-sexual) women for women. Both have their origin during the Feminist Sex Wars, and the war on pornography. The predecessor of yaoi as we know it is boy love (shounen-ai) in shoujo manga. It then transformed into a genre that has more characteristics in common with shounen manga. Yaoi is distributed as manga, short novels, and novels (now also anime and games), both doujin and commercial. Slash however, is not commercially available and a purely fan-created subculture, like doujin yaoi. Recurrent themes in slash are science fiction and fantasy, while yaoi tends to be based on sports manga. However, now these differences are being leveled out.

Regarding the motivation to produce this slash and doujin (fan) yaoi, the theoretic base is de Certeau's "making do", further expanded on by Fiske, and MIT's Jenkins continues his work in this tradition. Female fan fiction has been extensively theorized by Russ (*Magic Mammals, Trembling Sisters, Puritans and Perverts : Feminist Essays*, 1985), Bacon-Smith (*Enterprising Women : Television Fandom and the Creation of Popular Myth*, 1991), and Penley (*Close Encounters : Film, Feminism, and Science Fiction*, 1991). Russ and Penley are slashers (someone who writes, imagines, and/or reads slash), and call slash "pornography for women". Studies theorizing yaoi in Japan are more recent. A lot of important research was published in 2005 and 2006. Nakashima analyzed the psychology of yaoi (『タナトスの子供たち—過剰適応の生態学』(Thanatos's children—the ecology of over-adaptation), 1998), Mizuma's perspective was psychoanalytical (『隠喩としての少年愛』(Shounen-ai as metaphor), 2005), and Nagakubo analyzed yaoi novels (『やおい小説論—女性のためのエロス表現』(Yaoi novel theory—an eros expression for women), 2005). Abroad, several young researchers provide important new perspectives (McLelland, Hodkinson, ao). Both genres are sometimes treated negatively in research as pathologies, but both genres have also been studied more positively, as being rooted in tradition.

An important problem in earlier research is the sometimes vague distinction between fans and academic. An acafan, a fan working in the academic field, is someone who was a fan before becoming they became a scholar of their fandom. This can cause a lot of complications and friction, and often the perspective of acafan is too narrow to provide a comprehensive perspective. Another problem is that yaoi and slash have been researched and theorized as local phenomena, but a comprehensive perspective is lacking. Especially the way yaoi and slash influence each other on the global stage needs studying. Therefore, the first task of this volume is,

through a comprehensive and comparative study of both genres, to gain new insights that into issues that are under-researched and under-theorized. Particularly, the way yaoi booming overseas affects local slash cultures. The second task concerns the fact that theory about the motivation to create both genres stops with the adaptation of Butler's theory (Butler, *Undoing Gender*, 2004) about gender performance (Bauwens, 2005, Wood, 2006). Building on this theory, I would like to think some more on 'the other' within the genres. The third is looking into how abroad, where this yaoi, homoerotic fiction for women, is produced in large amounts for the first time, this situation is reacted to. The method used was participant observation, and I plan to continue this to follow future changes in slash and yaoi fandoms. Over a period of five years, I did fieldwork in slash and yaoi communities on the internet, at conventions where yaoi doujinshi are sold, and talked to yaoi fans in Germany and Australia. The structure of this dissertation is as follows : Each part contains an overview, a detailed analysis and discussion, and a summary. The first part contains an overview of research already done, and explains why this dissertation is needed. The second part then goes deeper into the history of both genres, and describes how they melted together. Here is where I point out that local yaoi authors trying to adapt the genre struggle with cultural differences. The third part discusses in detail the function of yaoi and slash as sexual expression. Building on this, in the fourth part, yaoi's and slash's meaning and significance from a gender studies perspective are further analyzed and discussed.

2. Part two : Yaoi and slash's hybridization, and what becomes apparent in it

Part one gives an overview of the perspectives from which slash and yaoi have been theorized. Next, in part two, I would like to expand on the issues pointed out in chapter one, by giving an overview of the history of the objects of study and positioning them in the field of gender studies, and showing how important they are from a gender studies perspective. The hybridization of both genres is proceeding rapidly, especially abroad and on the internet it is now often difficult to make the distinction. What is more, the subgenres of yuri and femslash (both genres that depict romance between two female characters) are also homoerotic fiction created by (and for) women, and have a lot in common with yaoi and slash. That the appeal of homoerotic fiction for and by women (and teenage girls) is universal is an important object of study. Of importance to gender studies is that both genres are parodies of themes popular in mainstream romance and of hetero-sexual relationships. What becomes apparent here is that women are attracted to these genres because there is a lack of an 'other' constructed through sexual difference.

3. Part three : The genres' meaning as sexual expression

This part presents an analysis of how fans use these genres, especially how they use them as devices to think about gender, and about how they express gender issues, and how they avoid putting an 'other' constructed through sexual difference in their stories. Both genres do not have much merit as literature. If we read them as a means of sexual expression instead of as literature, especially in fan works themes like sexual violence and pregnancy stand out. This subgenre, in which there is no other constructed through sexual difference is called mpreg (male pregnancy). These stories are written rather than read, and are projections of anxieties about sex and reproduction. Pregnant bodies/people are constructed as sites of danger. By making the pregnant body male, fans highlight the absurdity of some situations women face only because they are women, like sexual violence and pregnancy and birth. This ties in deeply with feminist theory, some of which is so inaccessible that critics say it is worthless for real women with real problems. The feminist philosopher Nussbaum called Butler "the professor of parody" (Nussbaum, "The Professor of Parody", in *The New Republic Online*, 02.22.1999). Slash and yaoi are both parody, and when theorizing them as a feminist, as a form of resistance, can this theory, in part based on Butler's theory of gender as performance, be sound ? Part four explores this further.

4. Part four : Yaoi and slash's meaning and significance

This chapter first deals with both genres' functions as both private cultural resistance and political subversion. Overseas, supporting yaoi has been likened to a symbolic feminist act (Strickland, "Why the surging popularity of yaoi — graphic boy-on-boy comics — might be the source of the genre's downfall", in *SF Weekly*, 11.01.2006). In this case, this cultural resistance is resistance against the patriarchal hegemony in culture, including popular culture. However, most doujin yaoi and slash activity is still done in private or in-group. This is resistance without confrontation. But from a feminist perspective everything is political, including the private, therefore both genres are meaningful as resistance. Is meaningful also effective? As an answer to this question, it is possible to say that through their reading choices, fans queer themselves. This queering has an effect on the way they think. Thinking about gender roles affects their gender role, which is part of their actions, and their actions will have some effects on their environment. Secondly, since 2004, yaoi is in the public domain in post-modern societies. Commercial yaoi makes visible abroad what used to be private locally, women's interest slash, homoerotic fiction. Yaoi as produced and consumed overseas then may well be heading for a culture clash. Manga and anime, most of which is not pornography, have been accused of being all about sex and violence. Sometimes they have been conceived as 'threats to Western civilization'. Yaoi is described by many of its fans as pornography for women. Like in Japan, its audience includes teenage girls. However, in many countries, pornography is something that should not be sold to anyone not of age. Therefore, yaoi could be interpreted as harmful and not suited for its audience. Because of that works women have access to, and what women can create or imagine, including slash, may be regulated and censored. On a relatively small scale, this is already happening. If this sort of regulation happens more often, fans' resistance will be forced to become even more public.

Conclusion

Three important insights have been gained through the research presented in this volume. Firstly, yaoi and slash, genres made by women, are more than just gender performance. In yaoi and slash, readers and creators not only play with gender roles, they not only become temporarily 'queer', and they not only figuratively wear drag. By taking the other constructed through sexual difference, female characters (and thus themselves) out of their stories, they can still identify with the characters and yet avoid othering, and it becomes possible to enjoy these genres without reproducing sexual oppression. Secondly, the yaoi boom is transforming local slash subcultures, making women's interest in homoerotic fiction more visible than it ever was. This making visible forces its earlier function, that of private cultural resistance, to become public, or more public than it was before, cultural resistance.

Lastly, as 'a foreign subversive agent', yaoi is likely to invite a backlash much like manga already has. This backlash might describe it as an attack on local culture. In this way, yaoi and slash, genres now largely hybridized, are more than subcultures, more than just hobbies women enjoy hidden in private. They are important because they make apparent a new aspect of gender politics in a globalized world.

論文審査の結果の要旨

本論文は、女性によって描かれるホモエロティック・フィクション（具体的には、「やおい」「スラッシュ」等と呼ばれるジャンル。男性同士の性愛を描く小説およびマンガ表現）の生産と消費による、私的文化抵抗としての社会機能を明らかにすることを目的とする。やおい・スラッシュは、70年代の日本と欧米に端を発するが、とくに近年、日本のやおいは、欧米、旧ソ連、南米、東南アジアなどポストモダンな状況にある国や地域において、急速にブーム

として浸透しつつある。女性のホモエロティック・フィクションへの嗜好が普遍的な現象であるとするれば、それを研究することは、ジェンダー研究において重要な意義をもつ。

本研究は、やおい同人誌コミュニティや即売会での参与観察、海外（独、豪）を含むやおい愛好家とのインタビュー（面談およびオンライン）によってデータ収集がなされているが、その調査期間は5年余に及ぶ精力的なものである。本論文の構成は、第1章でやおい・スラッシュについて、その概要と先行研究の整理を行った後、第2章において、両ジャンルが現在どのように融合・浸透しあっているかを確認しつつ、そこで浮かび上がってきたこととして、海外においてやおいをグローカライズしようとする場合に文化的ギャップにまつわる問題が生ずることが指摘されている。第3章では、ジャンルの性表現としての機能を考察し、それを踏まえて第4章において、ジェンダー研究の視点から、やおいとスラッシュの意味と意義をより深く分析と考察し、やおいをはじめとする女性によるホモエロティック・フィクションの持つ政治性を見いだしている。すなわち、一つに、2004年アメリカ大統領選において見られたように、やおいのファンコミュニティが、やおい表現を通じて、政治的な集合行動の基盤となりうる。そして二つ目に、そのような直接的な政治的形態を取らないとしても、このジャンルを楽しむための読み物として選ぶことによって、読者は自らを「クエア」として位置づけ、そのことが、自らのジェンダー役割に影響する価値転覆的な行動になりうるという興味深い指摘がなされている。

本論文の学術的価値は、第一に、学問研究の対象とはなりにくかっただけでなく、それぞれ別々にとらえられていたスラッシュとやおいというジャンルをつなげて論じたことにある。ホモエロティック・フィクションという、見逃されやすい（実際、「見逃され」るべく潜在してきたのは、当事者達による暗黙の戦略でもあった）文化事象が、グローバリゼーションの中で、国籍やエスニシティ、年代を問わず、ハイブリッドに融合しつつ女性たちの間に広がりつつあるというのは、非常に興味深い発見である。また、男性同士の性愛という逸脱的性表現であるゆえに、それがサブカルチャーから浮上するにつれて今度は、文化摩擦と新たなオリエンタリズムを生み出しつつあるという指摘も、重要なものである。

以上のように、本研究は、精力的な調査に基づいて、ジェンダー研究、ポピュラーカルチャー研究、セクシュアリティ研究などの学際的なアプローチによって、従来の社会学では対象とされにくかった女性による性表現の意味と意義を理解することに成功している。

以上から、本論文は博士（人間科学）の学位授与にふさわしいものと判定する。